
リル

リル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リル

【Nコード】

N7215D

【作者名】

リル

【あらすじ】

等身大の20代のライフスタイル。Black Musicが好きでクラブに夜な夜な出かけていきます。ただただ遊び盛りな10代じゃない20代。人間の汚い部分やあたたかさであり、色んなことを考えます。人との出会いや別れ、20代にもなると誰にでもひとりひとりのstoryがあります。こんな生活も捨てたもんじゃないよな、そんな感じがします。

n o n a m e

あたしには名前はありません。

父親が誰なのか。

母親が誰なのか。

わかりません。

物心がついた時、あたしは『リル』と呼ばれていましたが、あたしはもちろん、日本人です。

今、あたしは【OL】というやつをやっています。意味は．．わかりませんが、【OL】と言われます。

TVで見るそれとは違う気がします。昼休みに、カーディガンを肩にかけてお財布を握りしめて、ビル街を歩いてOL仲間とランチになんて行くこともありません。

会社の窓から見えるのは工場と広いゴルフ練習場で、構内は自転車でヘルメットをかぶって移動します。

車通勤なので、もちろん【Suica】なんてものは持ったことはありません。

あたしの上司は作業着を着ています。周りにスーツを着ている人は名古屋からたまに現れる社長、ただ一人です。

通勤途中には、工場が建ち並んでいます。国道沿いの工業団地内にあたしの職場があります。

道を少し入ると、閑静な住宅街があり、2km四方に渡る大きな公園があります。公園を囲んだ桜並木の道を走るとサッカースタジアムが現れます。家はもうすぐです。

家に帰ると、猫が待っています。

名前は【ヤヤ】です。昔はノラ猫でした。

あたしと同じです。

あたしの家は、とあるマンションの一階の一室です。
小さな庭がついています。

夏になると、屋上で花火を見ます。隣のフットサルコートは夜まで
洸々と光が照らされています。遠くからは、サッカーの応援と、踏
み切りの音が風にのって聞こえてきます。

ここには居心地のいい風が吹きます。

ギリギリの都会ではないこの町で、一人ではない一人の時間が満喫
できます。

柔らかい風が部屋を通り抜けます。
布団の足元には【ヤヤ】がいます。

起こさないように気をつけて、トイレに起きます。
最近は暗い部屋でも眠れるようになりました。だんだんとこの生活
があたしの身体に馴染んできました。

明日も早い。

早く眠らなきゃ。

precious time

たまにあたしは一人でボーっと考えます。車に乗ってるとき、家にいるとき。

最近ではひとりの時間を大切に使うことを覚えました。勉強をしたり、旅行先を調べたり、大好きなブックミュージックを聴きながら音楽雑誌やファッション雑誌を読んだり、絵を描いたり。

それはひとりで過ごす有意義な時間です。この時間を誰かに潰されるのは絶対にごめんです。

一人は寂しくて苦手、という人はたくさんいるでしょう。

あたしも数年前まではそうでした。とにかく、人波にもまれ、誰かといなければ壊れてしまいそうな心の持ち主でした。それでも今は違います。

今は人混みが苦手です。

息が詰まって叫びだしたくなります。

だから電車には必要最低限しか乗りません。最寄りの駅までは家から徒歩10分ほどの距離です。現在、駅前には大きいファッションビルなどが建ち並び、昼夜問わず賑やかです。学生時代は、毎晩人を探して歩き回った場所です。そこにはいつも誰かがいて、そこからあたしの放課後が始まっていたのです。

今は人混みを避けるように買い物を済ませて家に帰ります。

大人になった証でしょうか。いや、そんな単純なものでないことは確かです。

自分を見つめることができるようになりました。一人の時間『も』、大切にできるようになったのです。

他の誰かを、他人としか見てなかった時代もありました。あたしのすぐ傍にいる人以外は、あたし達の背景にしか考えていなかったあの頃は、周りの背景があつてこそ、自分達の世界を独占することができました。まるで地球の中心は自分達だと言つように、その背景の中で、風を切って歩き回ることが日常でした。

背景はなくてはならないものであつても、耳を貸すことはなく、目を向けることもない。ただの壁紙とBGMでしかありませんでした。どのくらいの時間を費やして、周りを見つめるようになったのでしょうか。

あたしには、はっきりとしたいいくつかの記憶があります。

車を運転していました。周りの車内の声や音は何も聞こえません。何故か涙がとまらなくなったのです。運転しながら泣きました。

自分が辛い時、苦しい時、人は周りが『見えなくなる』と言いますが、そんなの嘘です。比べてしまうのです。自分と周りを。

比べることなんてしなくてもとにかくガムシヤラに楽しんでいた時には見向きもしなかった自分の背景。

その瞬間、あたしはただの他人の背景でしかありませんでした。

この記憶は忘れることのない記憶です。

目に見えない誰かと比べることはありませんでした。

新車を買ったとき、『みんなだってもう持ってる』

音楽を聴くとき、『N・Y・にいる人はいいな』

そして、二十歳でローンを組んで新車を買いました。

N・Y・へ留学する夢に向かいました。

いつもそうです。目の前にいる誰かでなく、頭の中の誰かと比べていたのです。

それが、この時に初めて隣の車の、通り過ぎる車の、後ろの車の、あの人と自分を比べてしまったのです。

みんながとても幸せそうに見えました。声の聞こえない車内の中で、行き交う人はみんな楽しそうに笑っていました。あたしのことなんて、誰も気にしない。みんなの空間には幸せが広がっていました。あたしは何も聞こえない空間でひとり取り残された気持ちになりました。

あれから何度も、この記憶が蘇ります。今は切ない位がちょうどいい。あたしは今、幸せな中にいます。そして時々思い出すのです。ごくたまにです。

普段は、やっぱり音楽を聴いたり、勉強をしたり、絵を描いたりしています。

それでも、あの時と比べて今のあたしがどれだけ幸せなのかを噛みしめる時間でもあります。

letter . .

『リル』

あたしは両親を知りません。

だから、名前の由来がどんなものかわかりません。

きつとリル・キムのような、リル・バウワウのような 『little』 からきた 『lil』 なんだろうと勝手に考えます。

ただ、あたしはただの『リル』であって、その後に続くものはありません。

だから、大人になった今でもあたしは、バウワウのようにはなれずに、一生『リル』のままなのです。

それでも、この名前が今は好きです。

時々考えます。

どんな人が考えたんだろう。

何を思いながらつけたんだろう。

それを考える時間、あたしは誰かの腕の中に抱かれています。

あたたかさはいつも人の腕の中にあります。どんな言葉でも決して埋められない心の隙間を、一瞬で埋めてくれるのは強く抱きしめてくれる腕だけです。

あたしは本当に大切なものに『大切だよ』という言葉をかけたりし

ません。何だか虚しくなるからです。

残念なことに、人は嘘をつくことができるのです。動物のように、本能だけをふりまいて生きることはいけません。

あたしは、人のあたたかさを、言葉ではなく身体だけで感じとるのです。

誰かの腕の中にいるあたしは、確かなあたたかさの中にいて幸せを感じます。

それはあたしにとって悲しい事実でした。

あたしには捨てられない手紙があります。

何度引越しをしても、身体ひとつとその手紙だけは捨てられずに存在しているのです。

【手紙】と言っても、可愛いレターセットの便箋と封筒ではありません。かっこいい縦書きの便箋に筆書きをされたものでもありません。

ボロボロのメモ用紙にボールペンの走り書きです。

それでも確かに、あたしへの【手紙】であって、単なる覚え書きのメモではないのです。

はるかに昔の話です。

あたしが幼稚園生の頃でしょうか。記憶は確かではありません。

幸せなことに物心がついた時には家族と呼べる存在の義理の母と父

がいました。

沙世「さよ」と修「しゅう」には奈緒という娘がいます。つまり奈緒はあたしの義理の姉にあたります。

彼らはあたしに対してごく自然に接してくれました。

ごく自然に、あたしが【施設育ち】であることも話しました。あたしもごく自然にそれを受け止めました。例えば奈緒の写真を見ているとき、あたしが

「リルも見たい」

と言えば、

「リルは施設にいたからここにはこれしかないのよ」

と、産まれてすぐに誰かの手の中に抱かれている一枚の写真を見せてくれました。

そこには確かにあたしを置いていったであろう母親の手元だけが写っていました。当時のあたしはその手に抱かれるあたたかさを感じとるのみで疑問や憎悪など抱えることはしませんでした。

ただ言われるままの事実を信じることしかない人間でいられたのです。

ただただあたり前の誰にでもある日常のように、それらを捉えることができていたのです。

それはここで育ったあたしの才能でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7215d/>

リル

2010年10月9日13時36分発行